

<b>〔科目名〕</b> 哲学I	<b>〔単位数〕</b> 2単位	<b>〔科目区分〕</b> 教養科目
<b>〔担当者〕</b> 大森 史博 Ohmori Fumihito	<b>〔オフィス・アワー〕</b> <b>時間:</b> 授業の初回に提示する <b>場所:</b> 613 研究室	<b>〔授業の方法〕</b> 講義
<b>〔科目の概要〕</b> <p>西洋哲学の歴史に登場する著名な哲学者、および主要な概念を厳選してとりあげ、解説し、考察をおこなう。哲学の学説や概念は一見ただけでは難解にも思われるが、その根本にある思考、核心にある問いに目を向けることにより、この学に端的に接近したい。西洋哲学の歴史にあらわれる人物、思想、概念に触れ、自覚的に考えることをとおして、われわれ一人一人が世界を生きることを学びなおすための思考の鍛錬をおこなう。</p> <p>授業において参加者には、自分の思考を可視化するための手段としてワーキングシートを作成してもらおう。ワーキングシートによる思考の可視化と振り返りが、考察を深めてゆく助けになるはずである。この使い方については授業のなかで詳しく説明する。また、大教室でおこなわれる授業では、手をあげて質問することをためらうかもしれないが、そうしたときも、このワーキングシートやオフィスアワーを活用して欲しい。難しいと感じても、問いを投げかけること、対話することができれば、理解も深まり、考えるためのヒントも得られるはずである。</p> <p>基本的には、毎回一つのトピックを読み切りにして、①前回の反復とあらたな問いの提起、②配布資料をふまえた解説、③レスポンスカードの作成、という組み立てをユニットにして授業する。しかし、限られた時間では完結できない場合も多くあるため、くり返し立ち戻りながら考察を深めたい。</p>		
<b>〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつか〕</b> <p>哲学は「知を愛する」ということ、つまり、あらゆる事象についてのおくなき探求を意味する。いかにも素朴な知の探求であると思われるとしても、みずから「問い」をもつことが根本にある。この授業が企図するところは、具体的な経験と眼前の事象に即しながら、われわれの学問や知識の深層にある、そうした「問い」を再考することである。</p>		
<b>〔科目の到達目標(最終目標・中間目標)〕</b> <p>中間目標:          西洋哲学の著名な哲学者の思想、主要な概念、核心にある問いを知る。</p> <p>最終目標:          学び覚えた哲学者の思想や概念をふまえ、自らの経験を背景にして、自分の問いを提起することができる。</p>		
<b>〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕</b> <p>問いの大切さを学んだ、普段考えないことにじっくり向き合ってきた、という声が寄せられている。履修者みずから積極的に、集中して考えることを本来として、この目的が実現できるよう工夫しながら授業をすすめていきたい。</p> <p>内容が難しい、抽象的で分からないという感想はつねにあった。この学問に触れ、楽しみながら学んでいくためには、問いや答えを言葉にしていくことが一番の方法である。たとえば、「抽象的で分からない」とすれば、「抽象」とは何かと考えてみるができる。こうした反省的な問いについては、授業の内容の一つとして取り上げることとする。</p> <p>自由に考えることは、この学問の楽しみ方の一つであり、魅力の一つである。そのうえで、恣意的な意見の表明だけでは学問として十分ではないという点に目を向けよう。提起する問いが答えを求める探究であり、思考の実践が一つの目的をもった営為であるならば、一つの問いが要求する答えは厳密なものでなければならない。このように、なにを問うのか、どのように問うのかという点に立ち戻りながら考察をかさねたい。</p> <p>授業中に気になることや分かりにくい点があれば、その都度対応してゆくの、その時その場で遠慮なく申し出ること。疑問や指示の不明な点をそのままにせず、オフィスアワーも活用して質問して欲しい。</p>		
<b>〔教科書〕</b> 使用しない。適宜プリントを配布する。		

<b>〔指定図書〕</b> なし	
<b>〔参考書〕</b> 『よくわかる哲学・思想』 納富信留 ほか編著、ミネルヴァ書房、2019年 『図鑑 世界の哲学者』 サイモン・ブラックバーン 監修、熊野純彦 日本語版監修、東京書籍、2020年 その他、授業のなかで紹介する。	
<b>〔前提科目〕</b> 前提科目はない。春学期に開講する「哲学Ⅰ」と秋学期に開講する「哲学Ⅱ」は、各々が独立に完結する授業である。どちらを先に履修してもよいし、どちらか一方だけを履修してもよい。	
<b>〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)</b>  全体の五分の四以上の出席を前提に、次のとおりの割合で評価する。 レスポンスカード・ワーキングシートの作成、授業内の活動や発言(50%)、期末の課題(50%)	
<b>〔評価の基準及びスケール〕</b>  A:80点以上 B:80点未満 70点以上 C:70点未満 60点以上 D:60点未満 50点以上 F:50点未満	
<b>〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕</b>  哲学には独特の難しさがあると思われるかもしれない。しかし、言葉や事柄そのものの難しさを、ひとつひとつ解きほぐしながら考える作業こそが哲学の営みであり、この難しさを楽しむことこそ、哲学への最良のアプローチの仕方だろう。自ら考え、自ら問いをもつことを本来として、焦らず、ねばり強く、授業に参加して欲しい。 授業各回のスケジュールや扱う内容は、参加者の関心や進行状況に応じて変更することがある。	
<b>〔実務経歴〕</b> 該当なし	
<b>授業スケジュール</b>	
第1回	<b>テーマ(何を学ぶか):</b> イントロダクション、「哲学とは何か」という問い <b>内 容:</b> この授業の趣旨と進め方、評価の方法、哲学とはどのような学問なのか、問いと答え  <b>教科書・指定図書</b>
第2回	<b>テーマ(何を学ぶか):</b> 「哲学の始まり」についての問い、ワーキングシートの意味と目的 <b>内 容:</b> 哲学とはどのような学問なのか(つづき)、アルケーの探究、ソクラテス以前の哲学者  <b>教科書・指定図書</b>
第3回	<b>テーマ(何を学ぶか):</b> 「存在」についての問い <b>内 容:</b> パルメニデス、存在と時間、自然学  <b>教科書・指定図書</b>
第4回	<b>テーマ(何を学ぶか):</b> 「知識」についての問い <b>内 容:</b> ソクラテスの死、不知の自覚、ソフィストとフィロソフォス  <b>教科書・指定図書</b>

第5回	<p>テーマ(何を学ぶか):「本質」についての問い          内 容:プラトンの哲学、探究のパラドクスとイデア論</p> <p>教科書・指定図書</p>
第6回	<p>テーマ(何を学ぶか):「自然」についての問い          内 容:アリストテレスの哲学、理論知と実践知、四原因説、幸福論</p> <p>教科書・指定図書</p>
第7回	<p>テーマ(何を学ぶか):「汝自身を知れ」という格率          内 容:オイディプス王の伝説、アウグスティヌスの哲学、デカルトの「われ思う」</p> <p>教科書・指定図書</p>
第8回	<p>テーマ(何を学ぶか):「思考」と「経験」についての問い          内 容:主知主義と経験主義</p> <p>教科書・指定図書</p>
第9回	<p>テーマ(何を学ぶか):「自由」と「必然」についての問い          内 容:神即自然、スピノザの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第10回	<p>テーマ(何を学ぶか):「なぜ」という問い          内 容:予定調和、多元論、ライプニッツの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第11回	<p>テーマ(何を学ぶか):「知の源泉」についての問い          内 容:ヒュームの懐疑論、連合説</p> <p>教科書・指定図書</p>
第12回	<p>テーマ(何を学ぶか):「認識の基礎づけ」についての問い          内 容:コペルニクスの転回、カントの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第13回	<p>テーマ(何を学ぶか):「問いと答え」について考える          内 容:ワーキングシート紹介、講評、再考すること</p> <p>教科書・指定図書</p>
第14回	<p>テーマ(何を学ぶか):「時間」について考える          内 容:時間と生、時間と永遠、永劫回帰</p> <p>教科書・指定図書</p>
第15回	<p>テーマ(何を学ぶか):「価値」について考える          内 容:ニーチェの哲学、総括と補足</p> <p>教科書・指定図書</p>
試験	